

千葉大学に30有余年を過ごして

齋藤 康

135年という長い歴史の中で、その4分の1近くそして今までの自分の生きてきたほぼ半分を過ごさせていただいたこの偉大なる医学部という組織と、それを形づくっている方々にただただ感謝の念で振り返るばかりです。長い間には時には一臨床医として、あるいは研究者として、あるときはスタッフとして、あるときは教室の責任者として、あるときは病院の責任者として、そしていま大学の責任者として、それぞれの時に多くの方々にご指導をいただき、楽しく過ごしてきた道として今振り返ることができますことを大変有難く思っています。その道すがら考えたことなどを述べたいと思います。

医学、医療を実践していくという領域には、いろいろな専門性を軸とした機関や部署が存在します。そのような中で、医学部、医学研究院というところで行われる医療とは何を目的に、何を創造し、そしてどのような価値観を持ち続けなければならないかを私自身考えるときもありました。多くの悩める人々に広く医療を実践していくという使命は、医療を施すことが許されている医師にとって避けて通ることの出来ない使命であることを充分理解できます。それも一つの義務であると信じます。それに加えて、それぞれ大学病院医学部の医師に科せられる役割は、他の医療機関とは異なるのは当然であり、“大学は何が求められているのか”という問いに常に答えていかねばならないものだと思います。大学病院の医療といえども、医療制度そのものの影響や経営という視点から、必ずしも単純に割り切れない現場のあることも承知しています。しかし、自らが生み出した新しい医療を実践すること、いち早く世界の医療を導入して実践する医療、長年にわたり実践してきた先進的高度医療など、実に大学でしか行われない医療が常に広く求められているのであり、また先輩は多く実践し、実績を示してきました。それが大学病院において行えるということは、単に施設が完備しているからというだけではなく、そこに集う方々が、そうしなければならない、そうすることによって誰も救えないこの人を救う、そしてその精神を、技術を、次世代に伝え、そこに継承された医療が再び行われなければならない、という使命感が存在していたということであると思います。必ずし

も施設にしても、研究費にしても、そして自らの生活そのものにも恵まれた環境とはいえない中で、ひたすら使命感に燃えて、実践し続けたという偉大な歴史を感じます。このようなことを語るにつけても、その環境は今後改善されなければならないことは当然ですが、その環境の中でそれぞれが会得した診療の意味ということについては、その世代にしか理解されないかもしれない情熱を感じざるを得ません。現在の社会情勢を考えても、医師育成の基本がどこにあるかを常に考えさせられる昨今ですが、過去に行われた医師教育もある意味では医師育成の中で極めて根源的な重要な意味をもっていたと考えます。その優れた意味を若い世代も必ず求めて来る時があることを信じたいと思いますし、どのような研修制度が行われようとも医療における医師としての使命感を忘れてはならないことであると信じます。

大学病院を考えると、教育 研究 診療と念仏のようにその果たすべき義務が語られてきました。目の前の患者を救うという使命も、極めて大切な使命です。次世代の立派な医師を作り出すことも使命です。そして病因の解明、新たな医療の開発などの研究も重要です。診療も教育も社会の要求という作用が大きくあり、大学病院以外の病院がその一部を取って代わるかもしれないということも含めて、今後位置づけが大学病院にどのようなになるのかということは不透明といわざるを得ません。それぞれの機能に応じて分担していくということは、当然行われるべきだと思います。一方、研究という視点では、明日の新たな医療を作り出すという機能は、基礎医学臨床医学など多様な領域を持ち、研究成果について検討する世界的なコミュニケーション機能を歴史的にも現在ももつという状況を考えてとき、大学病院が将来にむかって最も大切にしなければならない機能ということがいえると思います。日常診療に使用されている薬の開発という研究も、135年の間には大きく変化をとげたと思います。そこには臨床試験の科学的手法の大切さがより一層求められるようになり、そこには臨床試験に対する医師、患者の理解、医師と患者のコミュニケーションの重要性、試験そのものへの生物統計学の導入、法律的規制に関する扱いなど実に多様な仕組みが求められ、それら

の創成には大学の総合的实力は必須のものであると思います。具体的には、臨床試験をひとつあげても、単に製薬企業からの依頼されている仕事という以上に、新たな治療法を自らの専門性で立証させていくということを実践し、そこで行われる研究の手法の開発のみではなく、医師—患者間でおこなわれる未知なる物質の生体に及ぼす影響を探るという、いわゆるトライアルの科学を実践していくということが重要な研究分野になっていると思います。その背景には、この薬が正しいか、そうでないかを立証することは、次世代の同じように悩む患者を救えるかもしれないということについて自らの体をもって実践すると考える、いわば文化の創造であると考えることが必要なのだと思います。トライアルが単にモルモットの実験と同じでないかという誤解

から解放されることが大切なのだと思います。既に本学には「亥鼻イノベーションプラザ」の創設により多くの seeds を生み出す研究があり、基礎から臨床へのトランスレートを探る「未来開拓センター」があり、そして臨床試験を実践することを指導しコーディネートする「臨床試験部」が存在することは上述の思いをまさに実践している姿をみる思いがします。

医学部創立135年という歴史を経ながら、なおかつ未来に向かって飛躍しようとしている姿を拝見するにつけそこに学んで一医師として限りない誇りを覚えるのを禁じえません。更なる発展をお祈りします。

(さいとう やすし)

(学長：平成20—)